

「選挙はギブ&テーク」

2月16日昼、国立国会図書館の一室。共産党委員長の志位和夫(61)が社民党党首の吉田忠智(60)に語りかけた。「民主党はこちらが候補を降ろすのを当然だと思っていませんか。本来はいくつかの選挙区で少数政党に気を使うべきです」

「自民1強」に対抗するため7月の参院選で候補者調整を求める共産に民主はつれない態度をとり続けた。志位はこうも話した。「選挙協力はギブアンドテーク。候補者を降ろして一本化するには大義名分がいります」。吉田は「当然のことです」とうなずいた。

他党と一線を画してきた共産が現実路線にカジを切るきっかけは、2014年の衆院選だ。改選前の8から21議席に躍進したが、与党が計326議席と圧勝。勢いを得て昨年、安全保障関連法の成立に動いた。「うちが躍進しても安倍政権が多数を握り続けては意味がない」。志位は危機感を募らせた。

昨年9月18日、安保法成立の



会へ提出法案の廃止安保法
2月19日(党首野党談)

直前に内閣不信任案の共同提出で一致した野党5党の党首会談。「もしこれが通ったら出した人で政権をつくるんですよ」。志位の言葉にどよめきが広がった。法成立を受け、志位は同法廃止をめざす連立政権「国民連合政府」構想を打ち出した。

共産の積極姿勢に民主では警戒感が広がった。

元防衛副大臣、長島昭久(54)は10月、民主代表の岡田克也(62)に「うちにプラスになりません。利用されるだけじゃないですか」と慎重な対応を促した。安保政策などで溝が大きくなり、安易な協力は野合批判を強めかねない。党内には「実質的に選挙協力を得られればそれでいい」と考える議員が多い。

今年2月19日、共産は安保法の廃止法案を民主を含む野党5党で共同提出した。志位は協力の環境が整ったと判断し、「国民連合政府」構想を脇に置いて32ある1人区の大半で候補を取り下げる考えを表明した。

「立てないで待っているの」に。民進党の結党を2日後に控えた3月25日、共産党書記局長の山下芳生(56)は野党幹事長会談で、衆参同日選を視野に次期衆院選でも秋波を送った。だが民主幹事長の枝野幸男(51)は「どうぞ立ててください」とそっけなかった。

共産は28日、衆院選の候補者擁立を進める方針を確認した。「人のよい対応をしすぎた。でも共闘関係は崩れない」。共産内は民進への不満と期待が入り交じっている。